勿凝学問 253

血祭りやだまし討ちにかかわるのは僕の仕事ではないんだよ
それが僕と政治学者の違いかな

2009 年 10 月 22 日
慶應義塾大学　商学部
教授　権丈善一

まぁ、今や消費税を含めた税制改革が必要なことは高い知性などを持ち合わせずとも分かりきっていることだから、今後起こることは、政治センス(?)に充ち満ちた政治家たちのリーダーシップのもとで、万が一巧く展開するとなれば、冬の時代を生きる官僚をはじめとした人たちを血祭りに上げて国民の溜飲を下げてあげたり、血祭りをみて歓喜する国民をだまし討ちにして、マニフェストをうやむやにすることくらいかな――巧くいけばそういうことになるだろう。でも、血祭りやだまし討ちに協力することは僕の仕事ではないというだけの話である。僕と違って、政治学者ってのは、そういう血祭りやだまし討ちを嬉々として議論しては盛り上がっているように見えるのは昔からのことだけど、いいんじゃないかな、政治学者、そしてメディアの中の政治部ってのは、そういうのも仕事みたいだから。僕の仕事は、政策技術学として使える学問をできる限り総動員して、あるべき社会保障、あるべき税・財政の制度設計、あるべき社会経済制度の設計を行うことであり、政策技術屋としての僕は彼らとは根本的に仕事の質が違う。

こうした僕の仕事の性質と、政治が血祭りやだまし討ちの道に入ってしまった今、一昨日も、昨日も、そして今日も、原稿やインタビューの依頼を断ったこととは無関係ではない。お断りの連絡を受けた方々、つれない返事で申し訳ありませんでした。

ちなみに、僕の講義は、法学部の学生も履修することができ、毎年何人か講義に出席している。そこで年に一度は言うことは、

> 「僕の仕事と重なる政治学者ってのは、面白いほどに制度の細部ってのを知らないね。僕の考え方は、年金にしろ医療・介護にしろ、税・財政にしろ、あるべき社会保障制度の細部、各論をつめて、その制度を実現するための政治はいかにあるべきかという、いわば細部を積み上げて政治を語るという論法。この時、あるべき制度の設計ができない人たちの論ってのは、だいたいいつも邪魔。それと、メディアの中の政治部ってのも、政局だ権力闘争だ政権交代だと盛り上がるのが大好きな彼らは気付いていないだろうけど、大方僕がやろうとしていることの妨害をしている――生活部とか社会保障部とかで生活に密着した取材をしながら、地に足のついた記事を書いている人たちとは違いすぎるね。

君ら政治学科の学生は、しっかりとした制度設計、政策評価ができるような訓練をしておいてくれ。年金の保険方式、租税方式の根本的な相違点や高齢者医療制度をめぐる本質的な問題点も分からないままに――特に制度も理解しないままに、社会保障をめぐる政局を論じる政治学者や政治部の記者などにならないようによろしく頼むよ。迷惑なだけだ、知名度の高い大衆ってのは。」

・・・というようなもの。ということで、今年はもう言わないよ――って、春の講義ですでに、言ってしまったような気もするけど。